



Takashi TERAUCHI,
Charles Dickens: His Last 13 Years
 (194 頁, 2011 年 1 月, 本体価格 2,400 円)
 ISBN: 9784903935447

(評) 松村豊子
 Toyoko MATSUMURA

本書はヴィクトリア朝の大文豪ディケンズの晩年 13 年間の生活に焦点を当て、若く初々しい新進女優 エレン・ターナンとの出会いとその後の彼女との関係がディケンズにどのような心境の変化や「改心」を促したかについて考察した寺内孝氏の英文による野心作である。「前書き」において同氏は、まず、「1860 年のディケンズの『改心』」がこれまで書かれた彼の伝記から抜け落ちていると明言する。‘The biography of Charles Dickens has been written by many writers, but regrettably they all have overlooked the important fact that Dickens underwent ‘conversion’ in the sense of “a spiritual change from sinfulness, ungodliness, or worldliness to love of God and pursuit of holiness” (OED) in 1860’ (i). そして、「改心」を論証する意図のもとに、4つのエッセイ―“Dickens and Gad’s Hill Place”, “Reading Dickens’s three novels: *David Copperfield*, *A Tale of Two Cities* and *Great Expectations*”, “Dickens Self-Denying”, “Dickens Cornered”—と “Appendixes” が続く。いずれの論考でもエレンとの禁じられた秘密の関係がディケンズの敬虔なクリスチャンの「罪の意識」や「改心」を呼び覚まし、精神的成長を助長すると説かれる。ここで残念なことは著者の作品及び批評研究が未熟であるため、論考に説得力が欠け、「改心」の内容が意味不明に陥っていることである。寺内氏の熱意と思入れの深さは伝わるが、しかしながら、ディケンズの晩年の「改心」と『クリスマス・キャロル』におけるスクルージの「改心」とを同列に論じる短絡的な論展開に時として肝を煎ることも否めない。

晩年のディケンズについて論じる際、発展的な作家像の構築を目指すならば、彼の個人的な女性関係だけでなく時代思潮の特性にも留意することを薦めたい。まず、第一にディケンズが家族の情緒的な絆を最優先する核家族におけるマイホーム型の現代的な父親・夫でなく、所謂大家族の家長であることを見逃してはいけない。家長としての強烈な自負故に、彼は周囲の反対を押し切り公開朗読の巡業に乗り出し、共に暮らす家族だけでなく、別居中の妻キャサリンや愛人エレン、そして、彼女たちの家族や自身の兄弟の妻子等々の困窮す

る親類縁者をも支援したと思われる。G・K・チェスタトンはディケンズが家庭では「暴君」だったと言うが、ディケンズにとって、身内の女性は巷に渦巻く諸々の欲望の犠牲にならないように家庭で保護し指導する対象だった。ディケンズ夫妻の別居騒動の発端は、周知のように、エレンへ渡されるはずの贈り物が間違えて妻のキャサリンに配達されたことである。ディケンズの家長としての自負を考慮すれば、キャサリンの派手な抗議がなければ別居はなく、エレンへの恋愛感情も短期間で自然消滅したと思われる。

氏も指摘するように、晩年のディケンズは確かに不幸・不運に見舞われ、エレンとの密かな親交はその主要因だったと言えなくもない。しかしながら、彼がどの程度自らの言動を悔い改めたかは推測の域をでないのではないだろうか。家父長の自負は最後まで彼の精神的支柱だったと思われる。

ディケンズの伝記的な側面よりも小説家としての変貌に関心がある評者としては、1850年代末（ディケンズがエレンと出会った頃）から1860年代を通して一世を風靡するセンセーション小説の勃興にディケンズが多大な影響を及ぼしたことに着目したい。キャサリンとの別居騒動をめぐり、『ハウスホールド・ワーズ』に出資していた出版社ブラッドベリ・アンド・エヴァンズと決裂したディケンズは、1859年4月に新たに『オール・ザ・イヤー・ラウンド』を刊行する。この創刊間もない雑誌に連載されたウィルキー・コリンズの『白衣の女』はほぼ同時期に出版されたエレン・ウッドの『イースト・リン』やM・E・ブラドンの『レディ・オードリの秘密』と並び、センセーション小説の傑作として今日も称賛されている。これらの小説はおしなべて家庭内の不和や暴力を題材としている。家庭の平和が広く称揚された当時、作家として、また、ジャーナリストとして既に地位と名声を確立していたディケンズの後押しがなければ、重婚、家庭内殺人等々の刺激的な、時に荒唐無稽な内容の故に、センセーション小説が隆盛を極めることはなかったと思われる。寺内氏はジョージ・エリオットの作品と生き方がディケンズの「改心」に少なからず影響したと言うが、彼女の多感かつ自立心に燃えるヒロインたちはセンセーション小説の隆盛に多分に影響されているのである。

以上のように考えると、ディケンズの晩年は氏が力説するほど「改心」に色濃く打ちのめされたとは思えない。

最後に基礎文献の調査収集の重要性について述べよう。本書にはディケンズ研究の第一人者であるマイケル・スレイター教授による最新のディケンズ伝 *Charles Dickens* (New Haven: Yale Univ. Press, 2009) が参考文献のどこにも見当たらない。作家作品を論じる場合、論者の興味や意欲は言うに及ばず、基礎文献の活用も読者の賛同を得るためには欠かせないのである。